目指せ、世界！海外で活躍する日本人プレイヤー⑰

連載17

渡辺尚洋 Takahiro Watanabe

ブランデンブルク州立管弦楽団フランクフルト
ソロ・イングリッシュホルン奏者、オーボエ奏者

「新プロイセン・フィルハーモニー・ベルリンを、一昨年設立しました。
このオーケストラをいつか日本へ連れて行けたらと思っています」

文＝中 東生
Text＝Shinobu Naka

オーボエの音色に恋して、フランクフルトで活動する渡辺尚洋さん。ソロ志向からオーケストラに転向し、現在は自ら創設に関わったオーケストラを持ち、運営にも興味を持ち始めたとのこと。30年以上にわたる渡辺さんの音楽人生を辿ります。

音楽、そしてオーボエとの出会い

「4歳からヴァイオリンを、5歳からはピアノを習っていましたが、幼児教育の一環としてでした。中学校でブラスバンド部に入ったのがきっかけで、オーボエと出会ったのです。母校での担当はバリトン・サクソフォーンでしたが、地区大会で初めてオーボエという楽器を聴き、その音色がいっぺんで大好きになってしまったのです――実は、その時吹いていらしたのが、指揮者飯森範親さんの弟さんの飯森理信さんだったのですが――、当時は、自分で楽器を持っていればブラバンの中でも吹いてよいという時代でした。そこで親に、『ヴァイオリンもピアノも売っていいから、オーボエを買って』とせがみ、やっと手に入れたのです」

ソロ志向だった音楽学生時代

「音大受験準備を始めたのは高校2年生になってからでした。それまでの間、ずっと親の耳元でささやき続けて、やっと許されたのです。

一浪して東京藝大に入学しましたが、オーケストラには興味がなく、ソロや室内楽で身を立てたいと思っていました。大学院生の頃に、当時日本ではほとんど無名のトーマス・インデアミューレのソロ・コンサートを聴いて、『こう吹きたい』と確信を持ちました。小畑善昭先生も勧めて下さいましたが、楽器を自由自在に扱う彼の奏法が自分の進みたい道にピッタリと合ったのです。

当時オーボエは、オーケストラの中でこそ映える楽器という認識が強く、オケの中でいかに上手く弾くかといったことに重点を置いて学ぶ環境だったので、ソリスティックなものに憧れていた自分とは相容れないものがありました。翌年の1991年にはスイスのチューリヒ国立高等音楽院に留学していました」

「最初の1、2年はコンクールを受けまくりました。それなりの結果は出せましたが、受け続けるうちに、ソロとしてやっていくのは残念ながら無理だ、と失速していく自分がいました。帰国してソロ活動するという選択肢もありましたが、ヨーロッパのシステムを知ってしまうと、もう日本でやっていくのは辛くなります。オーケストラで少々弾く仕事はあったのですが、ビザ取得も難しく、教職も1日に何十人も教えなければならず、オーボエの生徒人口も少ないので、将来を考えて定職を得なければならないのならば、残るところはオーケストラだったのです」

オーケストラに入団

「1994年頃からオーディションを受け始め、ビール市立劇場の実習奏者として雇ってもらい、初めてオーケストラの仕組みを学びました。95年にはチューリヒ音楽院を卒業しなければならなかったので、隣街のヴィンタートゥール音楽院でルイーズ・ペレラン先生につきながら、オーディションを受け続けました。20回目のオーディションで、ノルトハウゼン歌劇場管に合格したのが96年12月でしたが、半年の試用期間付きで、97年6月に再試験を受け、ようやく終身契約を手に入れました。そしてその直後、卒業試験を済ませ、留学生活にピリオドを打ちました。この街は人口5～6万人の小さな街で、歌劇場も家族的な雰囲気なので、経験を積むには良い場所でした。楽しく学んだ6年間でしたが、やはりもっと大きな街へ行きたいと常に思っていました。

そして30回目のオーディションで、現在のブランデンブルク州立管弦楽団フランクフルトの契約をもらいました。ドイツ音楽の拠点とも言えるベルリンから車で1時間ほどのフランクフルトはベルリンの影響も強く受けています。街の横に川が流れていて、それを越えるとポーランドなので、旧東独的でもあります」

恩師との再会で自分の音楽を再確認

「（オーボエの魅力は）奏者によって、それぞれ違う音になるところです。他の楽器でもその傾向はあると

ブランデンブルク州立管弦楽団フランクフルトの集合写真。C.P.E.バッハ・コンツェルトハレ（本拠地）にて ©Tobias Tanzyna

南ドイツ演奏旅行中、ミュンヘン・ヘラクレスザールにて（2014年）

草津夏期国際音楽アカデミーを訪ね、約20年ぶりにインデアミューレ師匠に再会（2012年）

新プロイセン・フィルハーモニー・ベルリンの旗揚げ公演で（2012年）

チューリヒにて。トーマス・インデアミューレ先生のレッスンの後、学生たちと乾杯（1992年頃）

思いますが、オーボエはさらに顕著です。また、僕はイングリッシュホルンのソリストなので、より肉声に近いのです。リード作りなど、様ざまな要因が重なって上手くいった時の達成感は凄いものがあります。突き抜けるほどの音で、自分の中で感動してしまいます」

「学校を卒業後、インデアミューレ先生にはご無沙汰していましたが、還暦を迎えられるというので、先生が毎年教えている草津夏期国際音楽アカデミーにご挨拶に行ってみたのです。そのレッスンで先生のオーボエを聴いて『僕はこう吹きたかったんだ』と再確認できたことは衝撃的でした。

実は、僕は『ベルリンに住んでいても、ベルリンのオケで吹けない』ということにプレッシャーを感じていたのです。でも、これを機に、『人にどう思われるかではなく、自分がどんな音楽をしたいかが大切』という初心が蘇ってきたのです。貴重な体験でした」

オーケストラ結成へ

「一昨年の11月に新プロイセン・フィルハーモニー・ベルリン（Neue Preußische Philharmonie Berlin）という共益財団法人を設立しました。このオーケストラを通して、オケを運営するには、裏側でどれだけのエネルギーが必要なのかということにはじめて気付かされました。

この『プロイセン』という名は、ベルリンが文化・芸術に力を注いだ王様に守られていたプロイセン王国の時代を彷彿とさせるような、文化的、精神的に自由な音楽活動を目指す、という意味です。レパートリーで言えば、モーツァルトからシューベルト、メンデルスゾーン、ブラームスまで、ドイツの古典からロマン派初期のものを得意としています。このオケをいつか日本へ連れて行けたらと思っています」

■渡辺尚洋
Takahiro Watanabe

1966年神奈川県生まれ。東京藝術大学を首席で卒業。チューリヒ音楽院、ヴィンタートゥーア音楽院修了。T・インデアミューレ氏、L・ペレラン女史に師事。第7回、第9回管打楽器コンクールにて入選と第2位入賞。第3回国際オーボエコンクール・東京にて日本航空賞、92年マルクノイキルヒェン国際コンクールにて奨励賞。97年よりノルトハウゼン歌劇場／ゾンダースハウゼン交響楽団の首席奏者を務めた後、2003年よりブランデンブルク州立管弦楽団フランクフルトのソロ・イングリッシュホルン奏者となり現在に至る。ソリストとしてこれまで多くのオーボエ協奏曲を演奏、01年にはペテリス・ヴァスクス作曲「イングリッシュホルン協奏曲」のドイツ初演を行い、本年5月フランクフルトでの再演が予定されている。新プロイセン・フィルハーモニー・ベルリン主宰。

■ブランデンブルク州立管弦楽団フランクフルト
Brandenburgisches Staatsorchester Frankfurt

1971年、クライスト劇場管弦楽団とフランクフルト文化管弦楽団が統合したフランクフルト・フィルハーモニック管弦楽団を母体として、95年に現在の州立管弦楽団となった。ヘリベルト・バイセル監督（2001～06、現桂冠指揮者）時代に音楽的な向上を遂げ、演奏活動も活発になった。ドイツ東部のフランクフルトを拠点としてラトヴィアやロシア、ポーランドなどに多く客演する。2005年には日本にツアーを行った。19・20世紀の知られざる名曲の演奏に重きをおいており、これまでに28枚ものCDをリリースしている。